

池島勘治郎作品・資料調査についての報告書

大阪新美術館建設準備室 外部研修生
奥野早輝子

1、はじめに

池島勘治郎（1897－1980）は、大正～昭和時代にかけて大阪を拠点に活動した水彩画家である。戦前は住居の近くの大阪南の橋や川の風景を多く描き、特に道頓堀の風景を好んで描いた。のちに抽象画を多く制作するようになり、「虫の舞」や「王者の舞」など、舞踊を主題とした作品を多く描いた。

今回の作品調査の目的は、大阪新美術館の開館に向けて作品の状態を把握し、修復の必要なものを選別することである。また、その状態も含めて「作品」として展示するに値する作品か「資料」として扱うべき作品なのかを判断する。その上で、池島勘治郎の唯一の作品集（1986年「池島勘治郎遺作展」カタログ）の巻末に載る年表に載っていない作品があれば新たに追加し、年表の充実を図る。

2、研修日程

2018年8月21・22・28・29日 9時～12時、および池島勘治郎についてのレポート執筆

3、調査内容

作品の主題・タイトルなど内容について、保存状態（折れ・破れなどの有無）について、サイン・裏書について、梱包状態について、これらを記録し、以前に取られた調書も参考にしながら作品調書を作成した。

4、池島勘治郎の作風の変遷

池島勘治郎は、明治30年（1897）大阪市のみりん・焼酎醸造業を営む家に生まれた。幼い頃に両親と兄を亡くしたことから、中学卒業後は美学校への進学を断念し家業を継いだ。しかし絵の勉強を独学で続け、大正11年（1922）第4回帝展に「曇り日の河岸」が初入選する。その後も何度か帝展に入選したが、この頃は大阪の町を描いた風景画を主に制作していた（図1）。

昭和7年（1932）、別車博資・桂龍雄・青野馬左奈らとともに関西水彩画協会を設立したのと同時期に、写実的な風景画に加えて徐々に抽象画的な作風がみられるようになる。透明水彩からグワッシュに画材を変え、独立展へ出品す

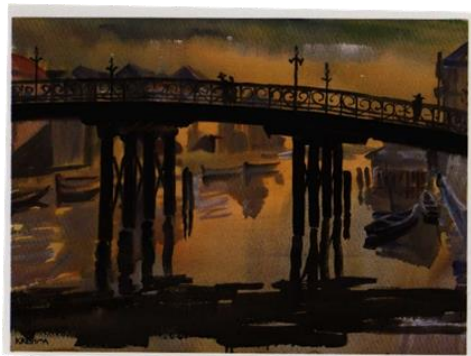


図1 大正14年第6回帝展入選
「橋」74.5×56 cm

るようになった(図2)。当時100人あまりいた独立美術協会の中で唯一の水彩画家であったという。村松寛は、「フォービズムを核に発足した強烈で重厚な独立展の油彩の作品群の中であって、水彩ながらその筆勢と鮮烈な色彩で一歩もひけを取らず確たる存在を主張していたのである」と述べる¹。

池島は、昭和30年(1955)頃より雅楽や舞踊をモチーフとした作品を独立展に出品するようになった(図3)。村松によると、池島はしばしば四天王寺雅亮会に招かれて雅楽鑑賞をしていたという²。晩年まで制作された舞楽モチーフの抽象画は、その経験から生み出されたものと考えられる。

5、研修を通して学んだこと・感想

倉庫に保管されている池島勘治郎の作品は300点以上とかなり多く、その全てを調査することは不可能であったが、以前に作成された調書をもとに比較的スムーズに作業が進んだ。以前の調書では裏書の詳しい記録が取られておらず、ほとんどの作品の裏書を改めて記録することとなった。

すでに「作品」として扱われているものは額装されているなど比較的保存状態が良かった。あるいは保存状態の良いものを「作品」としたのかも知れない。今回は、現状で「資料」として扱われているものを多く調査した。1メートル四方を超えるような大きな作品は段ボールで作った枠をガムテープで固定し、薄様を間にはさんで重ねられていた。作品自体には折れや剥落が確認されるものが多かった。もともとそのようになっていたのか、この保存環境の中でそうなったのか定かではないが、これらの「資料」を「作品」として展覧会などに出せるようにするには作品自体の修復に加えてマット装等作品保存環境の改善が必要である。

「資料」を「作品」にするかどうかの判断については、作品の完成度の高さが大きな要素を占める。いくつもの池島作品を見るうち、これは「良い」作品なのではないか、と個人的に思うものがいくつかあったが、それがなぜ「良い」のかを言葉にするのは難しいと感じた。しかし、「良い」と思ったいくつかの作品には共通点があった。それは、筆遣いに勢いが感じられ、色のバランスが取れていることである。もしそれらを「作品」として展示するなら、どのようなキャプションをつけるのか、個々の作品の良さを考え、言葉に



図2 昭和8年第3回独立展初入選「手袋と鉢」75.5×57 cm



図3 昭和44年第37回独立展出品「ぶがく・なそり」162×130 cm

¹ 村松寛「池島画伯のユニークな画業」『池島勘治郎作品集』1986年。

² 村松氏前掲論文。

していく作業が必要である。どのような「作品」を展示するのかの判断は、美術館の特色や方針を表すという点で重要である。池島勘治郎という画家そのものをどのように紹介するのも含めて、その判断をしていかなければならない。池島勘治郎は一般的にはあまり知られていないが、大阪を拠点に活躍した画家として、同じ大阪に新設する美術館で紹介することは非常に意義のあることだと考える。

今回の研修を通して、水彩画作品の取り扱い方を学ぶとともに、池島勘治郎という画家が様々な試行錯誤を経て抽象画表現に行きついたことを知ることができた。学芸員を目指す中で貴重な経験になったと思う。また、膨大な量の作品を見ていくことで、同じ画家の作品の中でも「良い」作品とは一体何なのか、「良い」作品とそうでない作品の違いとは何なのかを改めて考えるきっかけとなった。今回の研修で学んだことや考えたことを、自らの今後の研究にも生かしていきたい。

【調査報告】

作品 No. 340

「雨情」 41.0×31.5cm、グワッシュ・紙

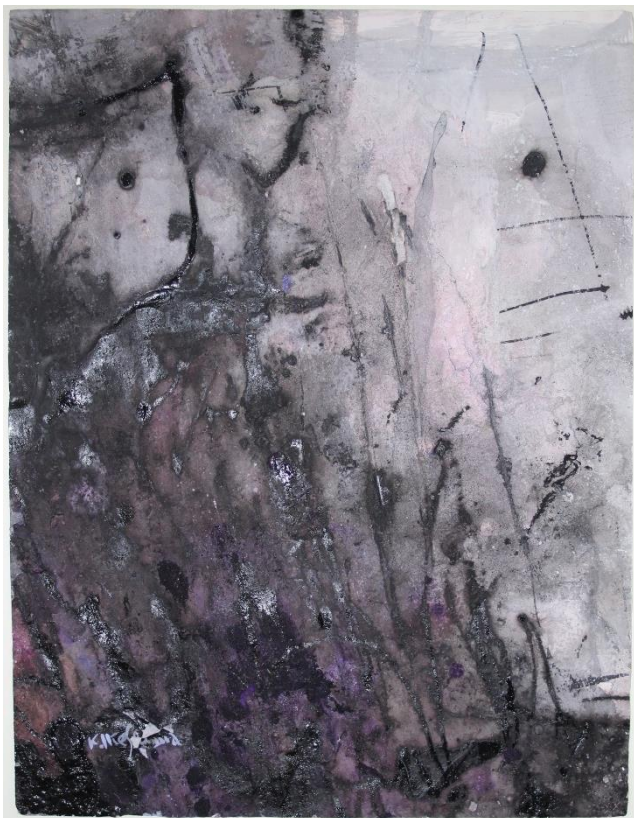
画面左下にサイン「K. Ikeshima」

裏書「雨情 池島勘治郎」

めくりの状態、薄様を間にはさんで他の作品と一緒に重ねて紙箱に保管されていた。

画面右上部分に絵具のひび割れと剥落がある。右下隅には折れが残る。左下のサイン部分
は一部剥落している。

全体



ひび割れ・剥落



折れ



剥落

